小説

文庫書下ろし

釘師サブやん

表勝負の巻

牛次郎（ぎゅうじろう）

KOBUNSHA BUNKO
光文社文庫

光文社文庫

文庫書下ろし／表勝負の巻
小説 釘師サブやん
著 者 牛 次 郎

1991年10月20日 初版 1 刷発行

発行者 大 坪 昌 夫
印 刷 萩 原 印 刷
製 本 光 洋 製 本

発行所 株式会社 光 文 社
〒112－11 東京都文京区音羽2－12－13
電話 東京 03(3942)2241(代表)
振替 東京 6－115347

© Jirō Gyū 1991
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-334-71413-7 Printed in Japan

光文社文庫

江苏工业学院图书馆
藏书章

大庫書下ろし

説釘師ブヤ
表勝負の巻

牛 次郎

光 文 社

『小説・釘師サブやん〈表勝負の巻〉』は、パチンコがまだ手動式であった時代、玉を巧みに放り込み、利き腕で自在に操ったパチンカーの技術と、それを阻止する釘師との虚々実々の戦いを、人間的苦悩を剝き出しに描ききった感動的ドラマである。

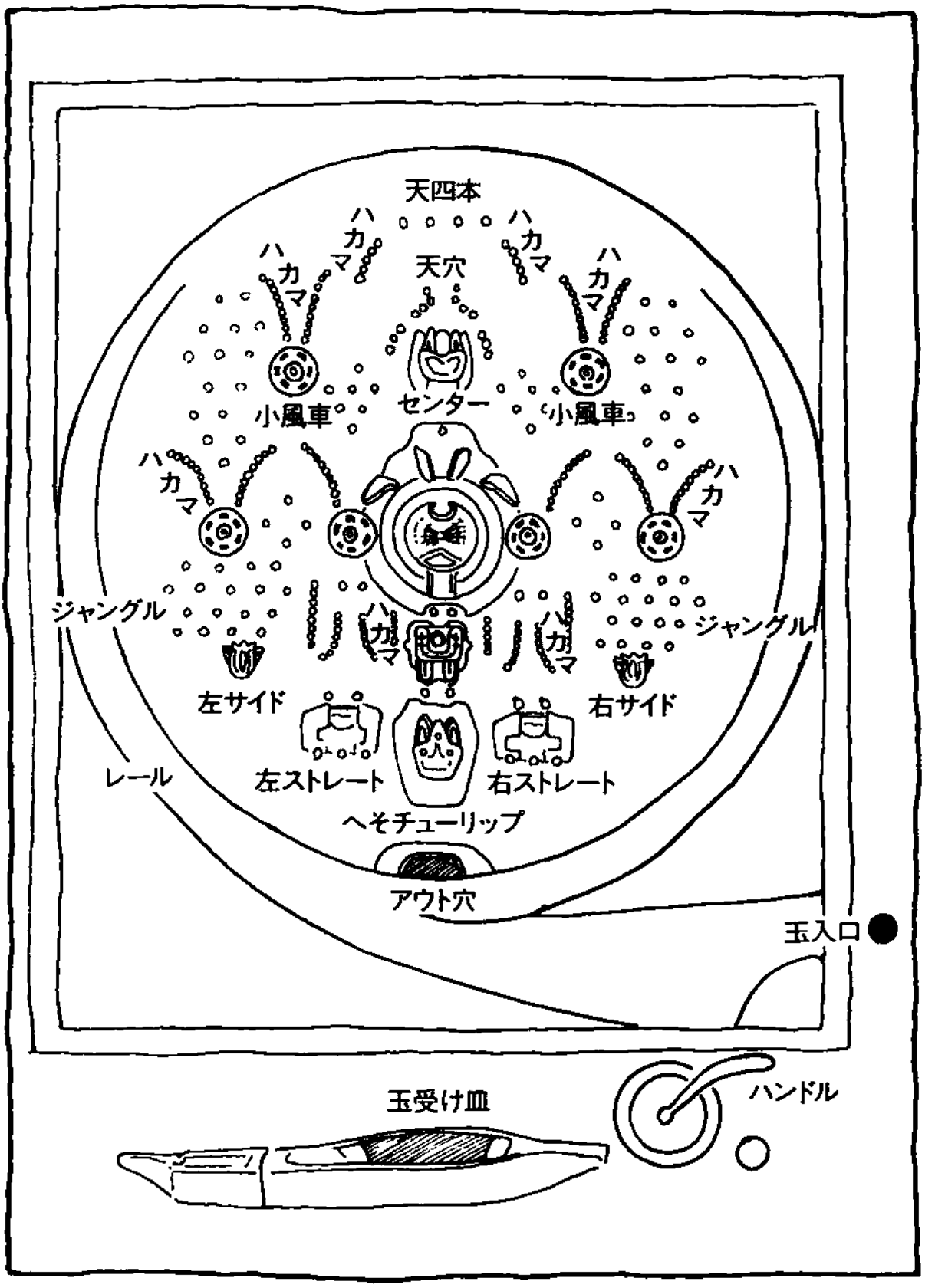
この作品は光文社文庫のために書下ろされました。

目次＝表勝負の巻

第一章　不敵な勝負師が現われた！　5
第二章　オレは釘に青春を賭ける　43
第三章　パチプロの恐るべき技とは？　84
第四章　避けられない対決が迫る　124
第五章　これが生命がけの金札勝負だ　167
第六章　釘師の意地を見せてやろう　195
第七章　勝利の女神にただ祈る　233

〈以下『裏勝負の巻』に続きます〉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com


天四本
ハカマ
ハカマ
ハカマ
ハカマ
天穴
センター
小風車
小風車
ハカマ
ハカマ
ハカマ
ハカマ
ハカマ
ジャングル
ジャングル
左サイド
右サイド
左ストレート
右ストレート
レール
へそチューリップ
アウト穴
玉入口
玉受け皿
ハンドル

手動式パチンコの名称

第一章　不敵な勝負師が現われた！

1　着流しの男

その男は、玉売場のカウンターの前に立つと、女子店員に、無言で、人差し指を一本立てて見せた。

「百円ですか？　それとも千円ですか……」

と女子店員が訊いた。

男は首を左右にゆっくりと振ると、次にカウンターの上に、一円玉を二個置いた。

「一発？……」

女子店員が驚いた声を上げた。

男がゆっくりとうなずいた。

「そう。一個で充分だ。どうせロクな腕の釘師ではなかろう。こんな釘の調整をするようでは

な……この一発で軽く稼いでやるよ」

女子店員がキッネにつままれた思いで手渡した玉一個を、掌でもてあそびながら、男は混雑している店内に消えていった。

パチンコの玉が一発二円の時代であった。

機械はまだダイアル式にはなっていなくて、ハンドルで打った。

拇指（おやゆび）を立てて、動かして見せればパチンコを意味する時代だったのである。

昭和四十年代前半――。

パチンコに、チューリップというヤクモノ（役得のあるセーフ穴）が出現して、一大パチンコ・ブームが到来した頃のことだ。

それまでのパチンコの当たり穴（チャッカーという）は可動式ではなかった。

ジンミットという中央の飛込み式の穴が、せいぜい盤面（ばんめん）の玉の動きに変化を与えるといった、おとなしいゲームであった。

オール十五という方式で、一回セーフ穴に入ると、十五個の玉が賞球として、玉受け皿にベルの音を鳴らして出てくるもので、セーフ穴ならどこに入っても、賞球の数は同じであった。

そこからオール十五という呼称が生まれた。

盤面には天が一個所、袖（サイド）が二個所、落とし（ストレート）が二個所、そしてヘソと呼ばれている盤面下部に一個所の六個所にセーフ穴が用意されてはあった。

これをパチンコの業界では、「スタンダード六穴」という言い方をした。

この型がスタンダードな盤面の釘と穴のレイアウトであるとして、どこの機械メーカーも、その型を真似ていた。

この型から踏み外れたレイアウトだと、不思議と客づきが悪くなった。

盤面の中央、センターと呼ばれる個所には、玉がセーフ穴に入ると派手に電球が点灯する部分があった。

ジンミットは、そのセンターにつくヤクモノであったが、可動式ではなかった。

それまでのパチンコは、釘の味と呼ばれる魅力で、客を惹きつけて遊ばせていたのであったが、チューリップの出現で、業界の様相は一変した。

チューリップは、玉が入ると穴の口の広さが三倍に拡がって、玉が入りやすくなるという、パチンカーにとっては、いかにもエキセントリックなヤクモノだったのである。

チューリップの花弁が、翼を拡げた形になるのであった。

これを発売したのは、成田製作所というヤクモノ・メーカーで、一気に会社が大きく成長した。

玉を一発だけ買い求めた男は、ゆっくりと空いている台を点検していった。

パチンコの玉などというものは、たいていの客が百円以上は買い求めるものであった。五十発である。

しかし、入らないときには、その五十個の玉は、滝から落下している水の早さで消え果ててしまうのであった。

だから二百円買う者、五百円、千円と買う者の方が多いくらいだったのである。

それを、たった一個しか買わないというのは、相当の変人ということになった。

男は仁侠映画の登場人物のように、和服の着流しであった。

雪駄を履いていた。

歩くたびに、

チリッ！　チリッ！……

という裏がねの音が鳴った。

粋な音であった。

その風体からして、堅気とは映らなかった。

頭髪を短く刈り込んでいた。

小松刈りという、職人たちが好んでするヘアスタイルになっていた。

一時の東映仁侠映画では、鶴田浩二や高倉健がそうしたスタイルであったが、その男は、スクリーンから、そのまま飛び出してきたような按配なのだった。

どうにも気障だった。

しかし、似合っていた。

懐ろ手のままで、ゆったりと歩いていた。
一見してのんびりとしているように映ったが、その男の、盤面を見る目は異様なまでに鋭かった。
釘の一本一本を確実に読んでいる。
その男が、二十七番の台で立ち止まった。
と、店員の知らせを受けて、事務所から、釘師の茜三郎(あかねさぶろう)が飛び出してきた。
三郎は、店員たちから、
「サブやん」
と呼ばれていた。
親しみをこめた呼び方であった。
着流しの男とは対照的にカッコ悪いタイプであった。
背丈は低いし、団子ッ鼻にどんぐり眼(まなこ)である。顔じゅうにソバカスがあった。
その上に縮れっ毛で、頭髪は、常に台風に見舞われている状態だった。
Tシャツにジーパンで、薄汚れたジャンパーをその上に引っかけるようにして着ていた。
ズックの踵(かかと)の部分を踏み潰(つぶ)してサンダルのようにして履いていた。
どこから見ても風采の上がらないタイプであった。
年齢は二十七歳。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一つの店を預かる釘師としては異例の若さであった。
それだけに、釘を打たせたら、天才的なものを持っていた。
そのことは自他ともに認めていた。
着流しの男は、そのサブやんを、
「どうせロクな腕の釘師ではないだろう」
と言って、一発の玉しか買わなかったのである。
わずらわしいが、注釈を加えておくと、正式にはパチンコの玉は、店から客が借りるのである。だから〝玉貸し代〟ということになった。
けれども、慣例で、客は、買うと言っていた。
それはともかく、着流しの男のことは、サブやんが常にいる事務所に、すぐに報告された。
勿論、サブやんの悪口も添えてのことであった。
サブやんは、別名、瞬間湯沸かし器とも呼ばれている男である。
すぐにカッ！　となってしまう。
カッとなると、すかさずその感情のままで行動に移る。
それで何度も失敗しているのだが、反省しても、性格だから直るものではなかった。
この時もそうであった。
店員が報告に来て、男のことを告げるなり、

「なに。オレのことをロクでなしだと」
と言うなり、次の瞬間には、事務所を飛び出していた。
「これはほうっておけないぞ」
と店員が後を追った。
すでに湯の沸き始めているサブやんなのである。
着流しの男と出会ったら、どういうことになるか、大体の想像はついた。
店内でのトラブルは困るのである。
トラブルを制止する役目である釘師が、自分から事件を惹き起こしたのでは始末におえない。
けれども、サブやんの勢いから察して、無事にすむとは思えなかった。
着流しの男を見つけるなり、サブやんは、案の定、
「あいつか」
と、男の方にツカツカと歩み寄っていった。
すでに、ソバカスの顔は、怒りで赤く染まり始めていた。
サブやんが男に近づいてゆくと、男はサブやんの存在に早くも気がついて、
「来たな、ロクでなし釘師が……」
とサブやんに聞こえるように呟いた。

2　サブやんの驚き

「オレのどこがロクでなしなんだ」
サブやんが噛みつく勢いで着流しの男に言った。
初めから喧嘩腰であった。
もっとも、男の方も喧嘩を売るような態度であったから、マッチの棒の頭にヤスリが当たったようなことになった。
「吼えるんじゃねえよ」
男はそういうと、一発の玉を、
グイッ！――
とサブやんの鼻先に突き出した。
「う……」
その玉にはDAIICHIという刻印が打ってあった。
サブやんが釘を預かっている〝第一ホール〟の玉であることに間違いはなかった。
玉には他店玉と区別するために、どこの店でも刻印を打ってあった。
「この玉が盤面でどう動くか、その節穴同然の目で、じっくり拝んでおくんだな」

「なんだと……」
サブやんは、怒りで頭が爆発しそうであった。
怒りすぎて、次の言葉が上手く出てこないくらいであった。
男が、機械に玉を投げ入れた。
玉は、百発皿と呼ばれる打球受けの溝を走っていった。
ハンドルの直接玉を打つ部分をキネ先バネという。
そこに玉が納まった。
キネ先バネは、ハンドルにかけるパチンカーの指の力が、微妙に伝わってゆく重要なところである。
文字通り、キネのようにして玉を打つ。
そのキネへの力をコントロールするのがハンドルで、拇指の使い方ひとつで、どのようにも変化していった。
それがパチンコの面白味なのだった。
玉がキネ先バネの位置にセットされると、男はゆっくりと、ハンドルに右手をかけていった。
サブやんが、それを見守った。
（ふん、お前みたいな奴に、この台が攻略出来る訳はない）
と腹の中で、男の打った玉が見事にアウト穴に消えてゆくことを想像していた。

そう思うのには理由があった。

男が玉を投げ入れた三十七番台というのは、〝回収台〟と呼ばれる種類の台だったからである。

パチンコの玉の出方というのは、その大部分を、釘師の調整で行なう。

その時に、基本的に、三種類の台に分けて、釘の調整を行なうのが、釘師のオーソドックスな仕方であった。

その三種類というのは、〝看板台〟〝遊び台〟〝回収台〟である。

看板台というのは、その店の看板娘になる台で、当然、面白いように玉が出るように、釘を甘く調整しておくのである。

客が遊んでいこうか、止めようかなどと迷った時に、他人が打っている台ではあっても、玉があふれるように出ているのを見れば、つい、「遊んでゆくか」と誘惑されてしまう。

看板台は、そういう集客の役目を担わされている。

この看板台についた客は、笑いが止まらないという訳だが、看板台というのはそうそうあるものではなかった。

看板台を沢山作った日には、店の方が降参してしまうことになるからだ。

せいぜいが、三百台設置されている店で、五、六台といったとこであった。

次の〝遊び台〟は、客がほどほどに遊べる台ということで、玉は出たり入ったりの状態で遊

び方を上手くやれば勝てるし、欲をかけばやられてしまうという台であった。

パチンコには、業界用語でスランプと呼ばれている特別な現象があった。

今まで面白いように出ていた台が、ある時点からピタリと、玉が入らなくなってしまうのである。

その現象が、あまりにもハッキリと出たりすると、パチンカーは機械の裏側で、何か工作をしたのではないかと思いたくなるのだが、そうではなかった。

それは機械の裏側にたまっている賞球用の玉と、客の用意している玉受け皿の玉の量の微妙なバランスから生じる変化なのであった。

この変化のことを〝スランプ〟といった。

急激な変化をする台を、スランプのきつい台と呼ぶ。

〝遊び台〟は、スランプが緩(ゆる)い。

だから、ほどほどに遊べるのであった。

店としても、せっかく入ってくれた客が、五分も持たない間に負けて、次々と出ていくようでは、店がガラガラになってしまって困るのであった。

適当に客が、台についていてくれなくては、次の客を呼び込むことは出来ない。

〝遊び台〟は大体が三分の一ぐらい用意しておくのが普通であった。

残る三分の二の台は、〝回収台〟である。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com